第3篇　絶対的剰余価値の生産

第5章　労働過程と価値増殖過程

　〔超約「資本論」的場読解〕

資本主義以外の労働

マルクスは、ここで青春時代から大きなテーマだった「労働とは何か」を展開する。

　一般的に、労働は自然に対して人間が働きかける行為であり、それによって自然をことで、労働はいう。やがて人間は、労働手段を発明する。この労働手段の発明こそが、人間の歴史を区分する画期をつくっていく。労働対象である土地に働きかけることで労働は対象化されていく。

こうして、労働対象と労働過程は生産手段、働きかける人間の労働は生産的労働となる。

こうして普遍的労働過程は人類史を貫徹する。この特徴は人間にとって使用価値をつくりだすことにある。

資本主義社会における労働は、まず、労働が資本の管理のもとにおかれること。次に、生産物が資本家の所有物になることがその違いである。

1. 労働過程

（労働と労働対象と労働手段）

p.311　労働過程の単純な諸契機は、合目的的な活動または労働そのもの、労働の対象、および労働の手段である。

（労働とは合目的活動）

労働とは、人間が自然に働きかけて、

自然そのものの形を変えることにより、

人間に役立つ物をつくりだすこと。

使用価値をつくりだすこと。

人間だけがやっている。

合目的とは、目的にかなったあるいは

意図的なある一つの目的をもった活動

の意味である。

目的をもって役に立ちものをつくる。

（労働対象）

p.311　存在する労働諸対象

人間が手を加えていない天然自然

に存在するもの。魚、木材、鉱石など。

p.311　それ以前の労働によってろ過されている。われわれはそれを原料と名づける。

人間の手が加わっている。

（労働手段）

　　　　　労働手段とは道具や機械・設備のこと。

p.313　人間をa toolmaking animalすなわち道具をつくる動物と定義している。なにがつくられるかではなく、どのようにして、どのような労働手段を用いてつくられるかが、経済的諸時代を区別する。

道具から機械へ。資本主義の一つの

特徴であり、「経済的諸時代を区別する」

としている。

　　　　　　生産の筋骨系統－人間の手の代わり

になつて。スコップ→パワーシャベル。

生産の脈管系統－お酒の樽。

「土地は労働者には〝立つ場所〟を」

与える。建物とか運河、道路も労働手段

である。

（労働対象と労働手段が生産手段

p.315　全過程を、その結果の、すなわち生産物の立場から考察すれば、労働手段と労働対象の両者は生産手段として、労働そのものは生産的労働として現れる。

ブドウ―はそのまま食べてもいい

し、ワインにしてもいい。途中にある

ものは段階製品、中巻製品と呼ぶ。

生産手段のうち、天然自然にあるもの

以外は、これは過去の労働の産物。過去

の労働の塊り、死んだ労働の性格をもつ。死んだ労働に生きた労働を加えることにより、それらが生き返る。

　p.320　生きた労働との接触は、こうした過去の労働の諸生産物を使用価値として維持し実現するための唯一の手段なのである。

労働手段あるいは労働対象に生きた

労働を加えることにより、新しいもの

をつくりだす。出来上がつた製品をま

た使っていく。

　それらの対象およびそれの手段を消費し、それらを食い尽くすのであり、したがって消費過程である。

　　　　　　個人的な消費ではなく、石炭を燃や

してさらに何かをつくる。生産的消費

である。

　　　　　　これらのことは、資本主義社会の特

有なことではない。

（資本主義のもとでの労働過程）

資本家は、生産手段と労働力を買う。

買った後で労働力の消費にとりかかる。

これは、生きた労働を加えることによ

って新しいものをつくると言うこと。

原材料から労働手段を使って使用価

値をつくることは、労働過程としては

いままでと同じことである。

p.322　ところで労働過程は、それが資本家による労働力の消費過程として行なわれる場合には、二つの独自な現象を示す。

第1－資本家が管理するもとでの労

働である。労働時間にしばられる。

　　　　　第2－生産物は資本家のものである。

資本家は労働力の1日分の価値を払う。

初期の大工は、道具と材料までを持

ち込む。残った材料めぐりトラブルが起きた。